

教えて♪ もくじい。シリーズ⑤

あなやま ばいせつ

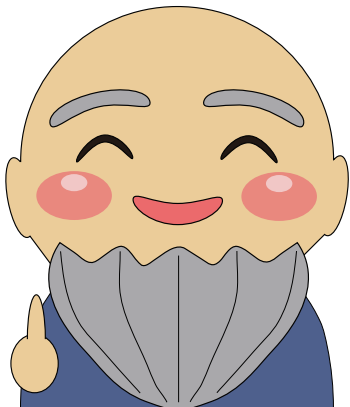
穴山梅雪の生涯と文化財

穴山梅雪は戦国時代から安土桃山時代の武将です。甲斐武田氏の家臣であり、御一門衆(親族衆)の一人として、後世には武田二十四将にも含まれました。もとは信君と名乗っていましたが、出家して穴山梅雪斎不白と号したので、梅雪の名でも知られています。武田信玄と勝頼に重臣として仕えましたが、信玄が亡くなり、織田信長が甲斐国に攻め入ると、勝頼を見限って徳川家康に従いました。

穴山氏は現在の身延町下山を拠点に河内地方(峡南地域とほぼ重なるエリア)を治めた時期があり、町内には穴山氏ゆかりの文化財や史跡が多く継承されています。

※武田二十四将…武田信玄に仕えた武将のうち、後世に講談や軍記物などで評価が高い24人。

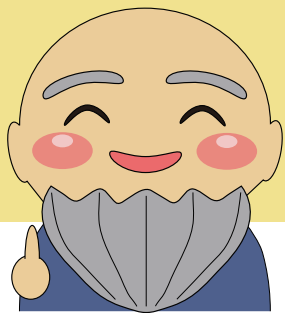
「武田二十四将図」のうち穴山入道梅雪信君画像
幕末から明治期の日本画家 松本楓湖の作
(甲州市塩山 信玄公宝物館所蔵)



梅雪は勝頼を見限ったことから“武田の裏切り者”の汚名を着せられてきたんじゃが、梅雪の出自や勝頼との関係性、穴山氏族の血筋を考えると、決して裏切り者とは言えない側面も見てくるんじゃ。梅雪の生涯や家族、そして下山地区に残る文化財をとおして、戦国時代の身延町に想いを馳せてほしいのう。

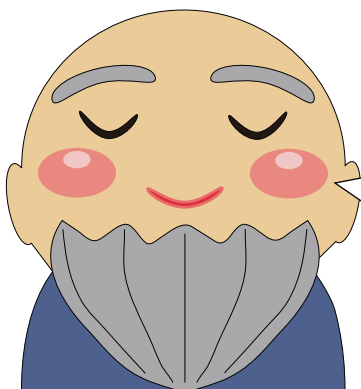
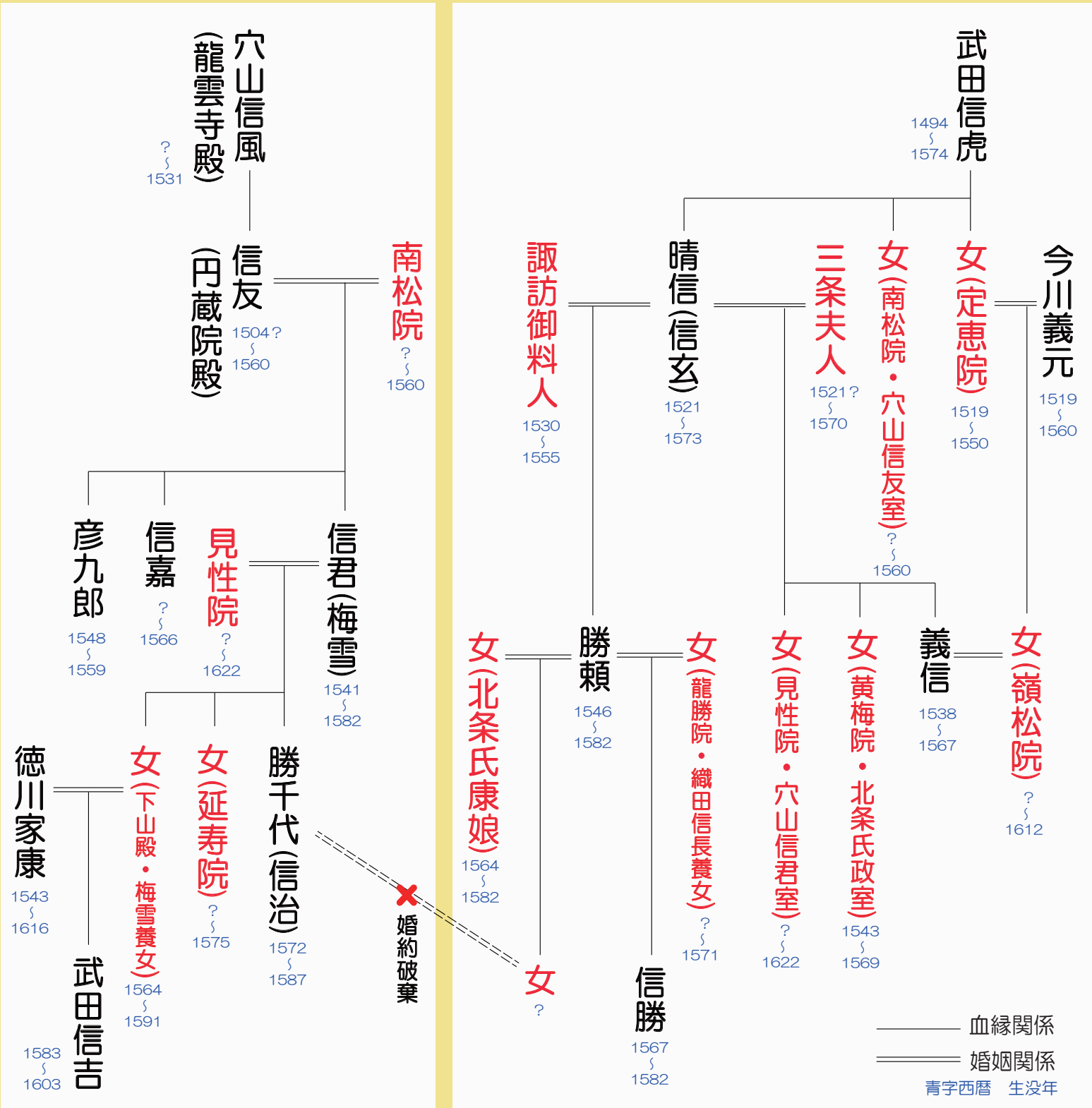
穴山梅雪の生涯

- 天文10年(1541) 穴山信友の嫡男として誕生。
- 天文22年(1553) 甲府の穴山氏館に入り、信玄に仕える。
- 弘治3年(1557) 第3次川中島の戦い。上杉軍と退陣中の情勢を駿河の今川氏真より尋ねられる。
- 永禄元年(1558) 父信友が隠居し、家督を継ぐ。
- 永禄3年(1560) 信友死去。享年55歳。
- 永禄4年(1561) 第4次川中島の戦い。信玄本陣の左翼で奮戦。
- 永禄8年(1565) 織田家と武田家の同盟が成立。信玄の嫡男義信の謀反が発覚。義信派の飯富虎昌らが処刑される。
- 永禄9年(1566) 母南松院(信玄姉)死去。弟信嘉、身延山で自害。
- 永禄11年(1568) 徳川家と武田家の同盟が成立。武田家の代表として交渉役を務める。
- 元亀2年(1571) 武田家が駿河制圧。北条氏との同盟復活。
- 元亀3年(1572) 嫡男勝千代誕生。信玄の西上作戦に出陣。
- 天正元年(1573) 信玄死去。
- 天正3年(1575) 長篠の合戦。織田・徳川の連合軍に大敗。戦死した山県昌景に代わり、駿河江尻城代に任命される。
- 天正4年(1576) 徳川家康が駿河へ侵攻。
- 天正8年(1580) 出家し、「梅雪斎不白」と号す。
- 天正10年(1582) 2月 織田信長が武田攻めを全軍に命じる。梅雪、家臣に命じて甲府の見性院、勝千代を奪取。徳川家康に従属の交渉を行う。
- 3月 武田勝頼一族と家臣が滅亡。梅雪は信長に仕え、甲斐国河内地方の所領を安堵される。
- 4月 母南松院の十七回忌法要で、自分が「武田中興」となることを誓う。
- 5月 家康とともに信長に招かれ盛大な酒宴を開催。
- 6月 本能寺の変。梅雪は家康と別れて帰国しようとするが宇治田原で一揆に襲撃され死去。享年42歳。



詳しい年代は不明じゃが、永禄年間に正室として信玄の次女(見性院)を迎えておるぞ。

穴山家と武田家の関係性



穴山家は甲斐守護・武田信武の子、義武が逸見郡穴山（現 韮崎市穴山町）の豪族の当主になったことが始まりとされておるぞ。以来、穴山家と武田家との関係は深く、歴代当主は名前に武田宗家と同じく“信”の通字とまりじを使用した者が多いんじゃ。一方、信玄の跡を継いだ勝頼は母方の諏訪家の通字“頼”を使っておるのもポイントじゃ。

梅雪の家族①



◆ 穴山信友

1506?~1560

武田信虎が甲斐国を統一する前は南部に拠点を置き、駿河今川家と友好関係を結んで武田家と争っていました。天文16年(1547)までに下山へ移転し、河内地方の金山や材木などの山の資源を支配しました。戦の前線で活動した記録はあまりみられません。甲府の留守居役や、今川家・信濃村上家との外交役として活躍しました。文人としても知られ、信玄とも歌会を開催した記録があります。

← 県指定文化財 絹本着色穴山信友画像(所蔵:円蔵院)

↓ " 絹本着色穴山勝千代画像(所蔵:最恩寺)

※画像提供:南部町教育委員会

◆ 穴山勝千代(信治)

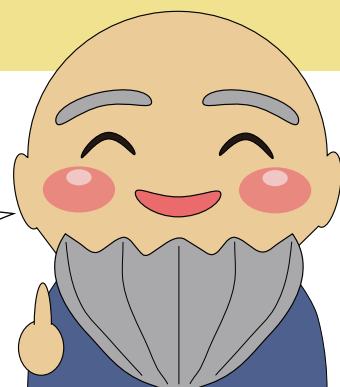
1572~1587

梅雪の嫡男として下山館で誕生。幼少期から幅広い教養を身につけ、天正8年(1580)に父の出家に伴って家督を継ぎましたが、幼少のため実権は梅雪が握っていたと考えられます。翌年、武田勝頼の娘との婚約が破棄されており、『甲陽軍鑑(※)』ではこれが梅雪離反の一因とされています。梅雪は離反に際して、織田信長と徳川家康に勝千代を武田家の当主とする了解を得ていました。本能寺の変に巻き込まれ亡くなった父に代わり、徳川家康の配下に加わり、北条氏と対決しました。



※『甲陽軍鑑』：武田家の戦略・戦術が記された軍学書。江戸時代には武家のみならず庶民の間にも広まり、講談や歌舞伎の原案になりました。

信友が駿河富士宮浅間神社へ宛てた文書では、武田を名乗っているんじゃ。穴山氏が外交の場において武田姓を名乗るのを許されていたことがよく分かるのう。



梅雪の家族②



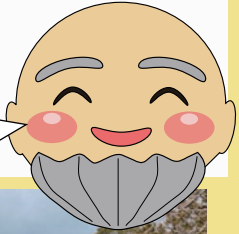
◆ 南松院（穴山信友室）

?~1560

武田信虎の次女。信玄の姉。天文10年（1541）に勝千代（後の梅雪）を出産。永禄9年（1566）に病没すると、梅雪はただちに生母の画像を描かせました。勝頼一族が滅亡した天正10年（1582）梅雪は南松院の十七回忌法要を営む中で、母の遺徳を讃えるとともに、勝頼の失政を非難し、穴山氏が武田家中興となることを述べています。

← 県指定文化財 絹本着色穴山信友夫人画像(所蔵:南松院)

この時代の武家夫人の肖像画は大変珍しいんじゃ。梅雪の母を想う気持ちが伝わるのう。ちなみに作者は信玄の弟、信廉ともいわれておるぞ。



◆ 見性院（穴山梅雪室）

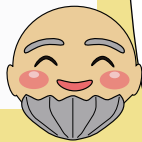
?~1622

武田信玄の次女。嫡男勝千代が早世した後、徳川家康五男の信吉を養子に迎えて後見人になりました。信吉も早世し、穴山家(武田家)が断然した後も家康に保護され、江戸城北の丸に住みました。2代将軍秀忠が侍女のお静に生ませた子(幸若丸・後の保科正之)を妹の信松尼(信玄五女・松姫)と共に養育しました。



南松院

武田信吉は常陸国水戸に封じられ、旧穴山家臣を付けらえて武田家を再興したんじやが、21歳の若さで亡くなってしまっただのう。水戸藩は異母弟の頼房が継承して、水戸徳川家の祖となっただんじや。その縁から下山の南松院には、水戸徳川家から送られた文書が伝わっておるぞ（※現在は山梨県立博物館に寄託）。また、幸若丸は見性院の縁で旧武田家臣で信濃高遠藩主の保科正光の養子になっただんじや。その後会津藩の初代藩主となって、異母兄の3代将軍家光をよく補佐したそうじや。その縁から南松院には家光より25石のご朱印地（※）があたえられて明治に至っただんじや。



◆ 下山殿（徳川家康側室）

1564~1591

武田二十四将の一人、秋山虎泰の娘。天正10年(1582)、梅雪が織田信長の配下になった際、梅雪の養女として家康の側室となり、家康五男となる万千代(後の武田信吉)を生みましました。

※ご朱印地：江戸時代に幕府や大名よりお寺や神社の領地として承認された土地。石高は土地の生産性を表す単位で、1石は成人が1年間に消費する米の量に相当します。

梅雪ゆかりの文化財①

町指定史跡

◆ 下山城跡 (穴山氏館跡)

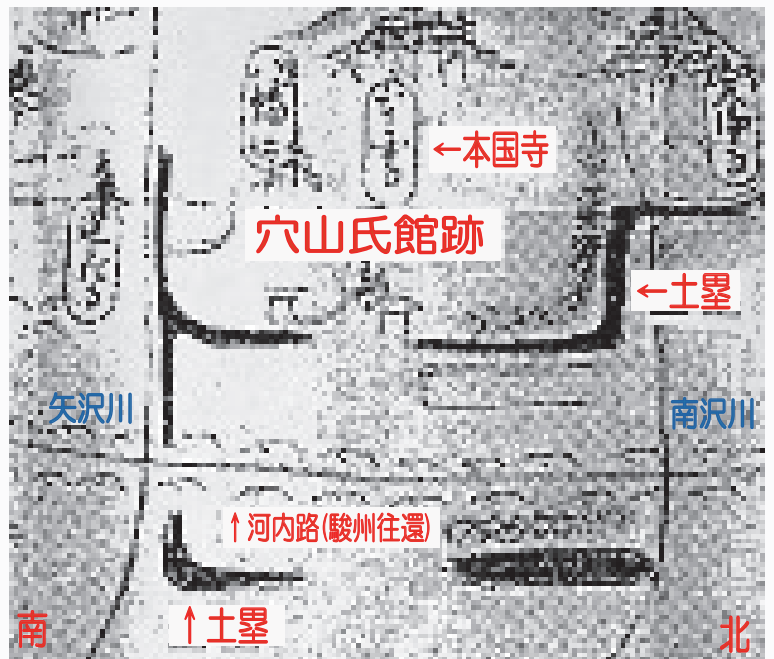
鎌倉時代に甲斐源氏下山光基の館であった場所は、戦国時代に穴山氏の館になりました。館は本国寺とその周辺に営まれ、『甲斐国志(※1)』に土塁や堀の痕跡が記録されています。江戸時代に描かれた「下山村絵図」から、館跡は南北を河川に挟まれ、本国寺境内と道路を二重の土塁で囲んでいたことがわかります。現在は下山立正保育園東側の竹林の中に土塁と堀の一部が残っています。



平成21年に地中レーダー探査(※2)を行ったところ、館跡周辺から堀や土塁などと思われる反応が計測されました。『甲斐国志』に下山は「河内領第一ノ殷邑ナリ」とあるように、穴山氏はこの館を中心に河内地方全域を統治し、下山を城下町として整備発展させました。

※1 『甲斐国志』：文化11年(1814)に成立した甲斐国の総合的な地誌。

※2 地中レーダー探査：電磁波を地中に向けて放射し、跳ね返ってくる反射波を測定することによって、地中の様子を探査する方法。水道などの地下埋設管等の調査のほか、遺跡範囲の確認調査に導入される。



◇「下山村絵図」に加筆

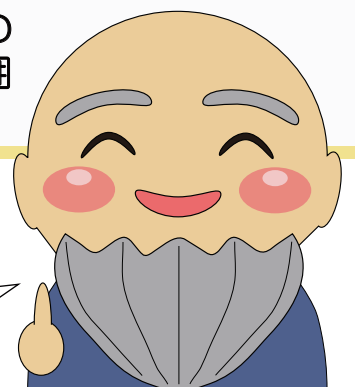


- 現存する土塁
- 現存する堀
- 探査結果で予測される土塁
- 探査結果で予測される堀

館跡は南北190m、東西170mの範囲におよぶ可能性がある。その面積は武田氏館跡(国指定史跡)の約7割の規模である。

◇地中レーダー探査結果

県内で戦国時代の城下町景観が復元できるのは、甲府市の武田氏館跡周辺、都留市の勝山城跡周辺、身延町の下山城跡周辺だけなんじゃ。山梨の戦国時代を語る上でも非常に重要な史跡と言えるのう。



梅雪ゆかりの文化財②



町指定文化財

◆一宮賀茂神社本殿

下山大工町にある神社。天平勝宝年間(749~757年)の創建と伝わり、戦国時代には河内領17社の社頭として、武田氏・穴山氏の篤い崇敬を受けました。江戸時代には幕府より約2万5千坪のご朱印地を受けました。本殿は安土桃山時代の形式を模した建造物で、元和7年(1621)の修理棟札が残っています。ご宝物として梅雪自筆の古文書や愛用品が収蔵され、町の文化財になっています。以下、その内の3件を紹介します。

◆穴山公の陣太鼓

穴山氏が戦場で持ち歩き、梅雪が寄進したと伝わる。内側に文安3年(1446)や、元禄12年(1699)・文政6年(1823)張替などの文字が読み取れる。



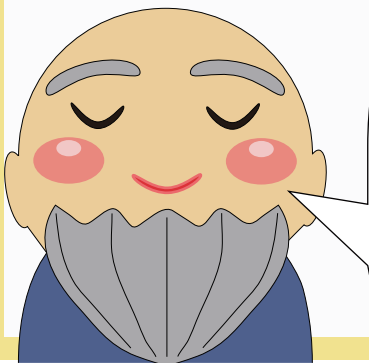
◆高時絵の硯箱

梅雪が寄進したと伝わる。蓋の表面に金泥で布袋が他者と遊んでいるところが描かれている。



◆中啓(蝙蝠扇)

梅雪の遺品と伝わる。絵模様は金箔の上に秋草と兔が描かれ、裏模様は笹の葉となっている。



一宮賀茂神社へ至る道は「番匠小路」と呼ばれておる。番匠とは大工の古い呼び方で、穴山氏がこの地域に多くの大工を住まわせたことに由来するそうじゃ。大工たちは江戸時代に「下山大工」と呼ばれて各地で活躍することになるんじゃが、また別の機会にじっくり紹介しようかのう。穴山氏は家臣や番匠のほかにも様々な職人を城下に住まわせて、その技術力を町づくりに活用したんじゃ。

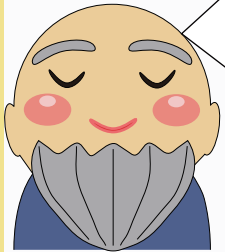
梅雪の最期...

天正10年(1582)5月安土城で家康とともに信長に謁見した後、泉州堺にいた梅雪は、6月2日日本能寺の変の知らせを受け、家康と別れて帰国しようとしたが、山城国宇治田原で一揆に巻き込まれたか、明智光秀に家康追討を命じられた士民に家康と誤認されて襲われ、家臣の帯金美作守らとともに自害あるいは殺害されたと伝わります。

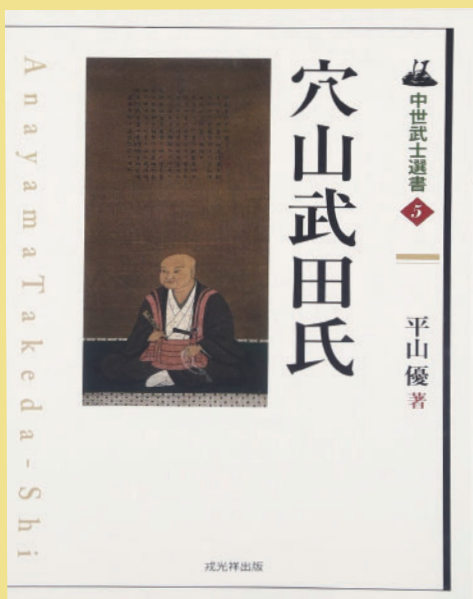
甲斐源氏にルーツを持つ名門武田家。武田姓の使用を許された穴山氏は、他の御一門衆と違い河内地方という自らの領地と領民を長く守ってきました。

梅雪はそうした伝統と自負のもとに、信玄亡き後は自らが武田家を再興しようという強い意志を持っていたと考えられています。

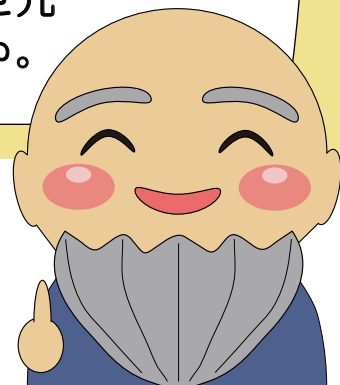
“梅雪＝武田の裏切り者”というイメージが少し変わったかのう。当時の武田家の内情や、織田家と徳川家の勢いを考えれば、梅雪のとった行動は必然とも言えるのじゃ。歴史はいろいろな立場で考えることが大事じゃのう。



梅雪一行の墓は現在、京都府京田辺市飯岡区きょうたなべし いのぶかの共同墓地にあります。悲運の武将として、飯岡の村人がこの地に手厚く葬ったと伝わります。



穴山梅雪やゆかりの文化財をもっと知りたい人へおすすめの本と資料じゃ。『穴山武田氏』は町立図書館で借りられ、「下山文化財絵図」は町の教育委員会で配布しておるぞ。興味のある人は下記のお問い合わせ先へ連絡じゃ。



お問合せ先：身延町教育委員会生涯学習課 文化財担当

住所 身延町常葉1025

電話 0556-20-3017

発行年月日：令和4年(2022)2月10日